

府中市立府中第六中学校

令和7年 12 月 18 日第8号

# 六中だより

～学校教育目標～  
“学力と情操”  
“健康と忍耐力”  
“勤労と責任”

## 「 短所を長所に 」

校長 佐藤 光宏

師走を迎え、校内には冷たい空気の中にも、一年の締めくくりに向けて真剣に様々なことに取り組む生徒たちの姿が見られます。2学期も残りわずかとなりましたが、学習面・生活面ともに、生徒一人一人の成長を感じています。

さて、三者面談期間を活用して3年生の面接練習を実施しています。一人15分ほどの短い時間ですが、私にとって3年生一人一人と対話できる貴重な時間です。面接で気づいたことは各自にフィードバックしていますが、“自分の言葉”で高校生活への目標や抱負を一生懸命伝えてくれる姿は、面接官である私の心に響くものがあります。多少言い間違えたり言葉に詰まったりしても、高校生活への意欲や前向きさは十分に伝わってきます。そういう意味では、暗記した通りに機械的に応答したり、うまく上手に答えようと意識し過ぎたりしないことがむしろ大切だと思います。

先日、ある3年生との面接練習でこんなやり取りがありました。私が「あなたの長所と短所は何ですか」と聞いたところ、その生徒はこう答えました。「私の短所は自分に自信がもてなくて不安になることです・・」、少し間を置いて、この生徒はこう付け加えました。「でも、自分に自信がもてるようになるために、高校では新しいことに進んでチャレンジしてあきらめずに努力し続けたいと思っています」。私はこの言葉を聞いてとてもうれしくなりました。自分の短所を見つめることができる人は、成長できる人だと思っています。むしろ、短所を素直に受け止めることができれば、短所を長所に変えられるのではないのでしょうか。自信過剰な人はすべてではないかもしれませんが、心に隙や慢心が生まれやすいと思います。自分に満足してしまうと進歩や成長が止まります。いつも「足りない」という気持ちを持ち続ける人は、必ず成長していくでしょう。六中生には、そんな気持ちのもてる生徒にぜひ育ってほしいと願っています。

## ◆12月の生活目標

### 礼儀正しい生活態度を身に付けよう

・服装 ・挨拶 ・清掃 ・授業態度

1年の締めくくりにも身も心も整理整頓！



## ◆デフリンピック観戦

11月19日(水)、2年生は東京2025デフリンピックのバドミントン競技を観戦しました。デフスポーツは、聴覚等に障害のある選手が、音などに頼らず視覚的な合図などを用いて行う競技です。聴覚障害により、情報量の制限やバランス感覚の課題など、練習や試合で不利な状況があります。それでも選手たちは高度な技術と集中力で試合に臨み、迫力あるプレーを見せていました。生徒たちはその姿に感動し、手話を使って応援するなど、積極的に声援を送りました。今回の観戦や、9月に実施した1年生のデフアスリート訪問授業を通じて、生徒たちが多様性を理解し、共生社会を築く力を育んでいくことを願っています。



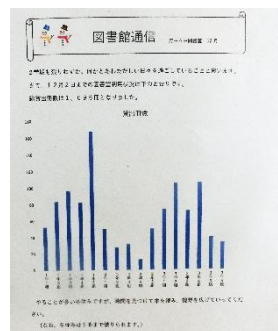
## ◆人権作文

本校では、1、2年生に夏休みの課題として、人権作文に取り組み、提出された作品を人権作文コンクールに出品しています。そうした中で、本校の生徒が学校代表として、府中市の人権作文発表会で朗読をしました。また、その作品は全国人権作文コンクール東京都大会に出品され、応募総数33000点を越える作品の中から、特別優秀賞を受賞しました。発表した本文を最後のページに掲載していますので、是非ともご一読ください。

## ◆生徒会の活動

12月13日(土)本校の生徒会役員が、府中市教育委員会が開催した「生徒会リーダー研修」に参加し、本校の取組を発表しました。他校の取組に刺激を受けた生徒会役員の更なる活躍に期待しています。

また、各専門委員会は朝読書や施設の利用について呼びかけをしています。生徒一人一人が、学校の自治について主体的に考え、自ら生活しやすい環境を作っていくこと期待しています。



## ◆「思いやり」の実現

11月26日の給食の準備において、食缶を倒してしまい、おかずがこぼれてしまったということがありました。おかずなしになりそうなところ、校内放送で「余ったおかずを持ってきてほしい」とのアナウンスがながれると、直ぐに幾つものクラスが、食缶を持ってきてくれました。最終的にこぼしてしまったクラス全員にしっかりとおかずが配膳されて、誰もが笑顔で給食の時間を過ごしていました。

本校では「信頼と思いやり」をスローガンとしていますが、この日の生徒たちは「思いやり」を行動で示してくれました。これからも「思いやり」の輪が広がっていくことを願っています。

**12月29日(月)～1月5日(月)まで学校は休業日となります。  
教職員は原則勤務しておりませんので、ご注意ください。**

妹が教えてくれたこと

「障害を持っている方には親切にしなければいけません。」「困っている人は助けてあげましょう。」「

いつ誰に教えてもらったかは思い出せない。もしかする  
といつの間にか刷り込まれた「常識」なのかもしれない。  
頭では分かっているのに、どこか外国のニュースを聞い  
ているような自分とは遠い世界の話のように思っていた。

僕には五歳年下の妹がいる。今まで一度もケンカな  
んてしたことがなく、一緒にゲームをして遊んだりもする。  
自分で言うのもちよつと恥ずかしいが、とても仲がいいと  
思う。なんと言っても妹の名付け親、いや名付け兄は僕  
だ。とてもかわいく自慢の妹だ。

ある日僕は、妹の事で話があると両親に呼ばれた。ち  
ようど妹が一年生になる直前で、僕と同じ小学校に通う  
ので「よろしくね。」とか言われるんだろーなと思いが  
ら軽い足取りでリビングに行く、僕が想像もしていな  
かった真剣な表情の両親がいた。両親は僕に、妹は「自閉  
スペクトラム症」という発達障害を持っていて、僕と同じ  
小学校に通うけれど、普通学級には通わずに、特別支援  
学級である「仲よし学級」に通うことや、妹は人が多い  
場所が苦手、視覚優位といって、ほかの人よりも目か  
らはいる情報が優先されてしまうことなど妹の特性につ  
いて教えてくれた。

僕が今まで外国のニュースのように感じていた遠い世  
界は僕のすぐ隣にあったのだ。

それから僕はネットやYouTubeなどで発達障害に  
ついていろいろ調べた。少しでも妹の事を理解してあげ  
たかったし、妹が発達障害だとは全く気付かなかったか  
ら、もしかすると僕の周りに、他にも障害で本当は助け  
や理解を必要としているのに、気が付いてもらえない人  
がいるかもしれないからだ。

妹が小学校に入学してしばらく経った全校朝会。僕が  
今でも思い出したくない記憶。その日の朝会では、妹は  
終始大きな声で泣いていた。きつと人が多い場所での不安  
になっているのだと僕は思った。僕はすぐにでも妹の隣  
に行つて、大丈夫だよ、怖くないよと言つてあげたかつた  
が、朝会中なので移動することができず、自分の不甲斐  
なさを感じていた。その時、僕の耳には信じられない言  
葉がいくつも飛んできた。

「うるさいな、外に出せよ。」「なにあの子泣いてるの。」「

「なにいつやばくない。」など耳をふさぎたくなるよう  
な、ナイフのような言葉だった。僕は心臓を掴まれている  
ような嫌な気分になった。更にふつふつと怒りが込み上  
げてきた。妹は泣き虫なくせに誰かが泣いていると必ず  
背中をさすりに行く心が優しい子なんだ。お前らに何が  
分かるんだ、と怒鳴つてやりたかった。でも僕にはそれは  
できなかった。妹の泣き声と心無い言葉だけが僕の心を  
支配した。

その日の朝会は何の話だったか覚えてない。

その日の夜、妹に向けられた酷い言葉について考えた。  
その結果「きつとみんな妹のことを、障害の事を知らない  
いからあんな言葉が出てきたんだ。」という結論に達し  
た。だから僕はこの作文でみんなに発達障害の事を少し  
でも知ってほしい。

発達障害の特性は、個人によって様々である。そして  
見た目では発達障害かどうか分かりにくい。だから周り  
や社会から理解されにくい。でも特性は欠点ではないとい  
う事をまずは知ってほしい。見る角度を変えればそれ  
が長所になる。妹は泣き虫で人が多い所は苦手という特  
性があるが、その分周りの泣いている子や不安そうな子  
のことをいち早く察知して、励ますことができる。僕は、  
これは妹の特性ではなく、チャームポイントだと思つてい  
る。

次はアンコンシャス・バイアスについてだ。これは「無意  
識の偏見」ともいい、障害者だから何を考えているか分  
からない等、相手を障害者だと理解した上で、当事者が  
無意識におこしてしまう偏見の事である。無意識とい  
うのはある意味、わざとよりも残酷で厄介だと思う。だ  
からみんなには、人のできない事を見つけるのではなく、で  
きる事、良い所を見つけてほしい。みんなが知っているエ  
ジソンやアインシュタインも発達障害だったのではないか  
と言われている。この偉人達が歴史に名を残しているの  
は、自身や周りが出来ない事を見つたり指摘したので  
はなく、出来る事を見つけ続けた結果なのではないかと  
僕は考えている。

だからみんなにも人の良い所を見つけ続けてほしい。  
妹は僕にたくさん事を教えてくれる。それは勉強や  
知識とかよりも、もっと大切なことだ。だから僕も妹か  
ら教えてもらった事をもっとみんなに教えていきたい。  
いつか当たり前に理解してもらえる日を目指して。